

Title	ワリニヤノのシャヴィエル探究
Sub Title	Valignani's research on F. Xavier
Author	吉田, 小五郎(Yoshida, Kogoro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1949
Jtitle	史学 Vol.23, No.4 (1949. 6) ,p.118(514)- 124(520)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特輯ザビエル研究
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19490600-0118

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ワリニヤノのシャヴィエル探究

吉田小五郎

若し日本のキリシタン史上、バテレン側に特に著しい人物を幾人か挙げるとするならばその中に聖フランシスコ・シャヴィエルとアレックスサンドロ・ワリニヤノの名を逸することは出来ないであらう。勿論、シャヴィエルは「日本切支丹の御開山」であり、東洋の大使徒と仰がれる人であるが、又ワリニヤノは、誰も知るキリシタン史華かなりし極盛期に來朝した巡察使である。二人とも識見力量ともに拔群であつたのみならず、單なるカトリック教の傳道者ではなくて文化の傳達者として忘れてならぬ人である。只シャヴィエルの活動した時期が創始期に屬し未だ十分その抱負を實現するに至らなかつたのであつて、眞にその志（傳道の企畫）を繼承し衣鉢を嗣いだしたのはワリニヤノであつたといつていゝ。この點、ワリニヤノの甥に當るフェルランテ・ワリニヤノが、アレックスサンドロを指して「シャヴィエルの化身」といつたのは適言といふべきであらう。

繚つてワリニヤノが、よく東洋におけるシャヴィエルの足跡を限なく巡廻し、且つこの事蹟を徹底的に研究した人であることを思へば、又頷ぶかれるところもあるのである。シェールハンマー師は、ワリニヤノを指して「極東における最も偉大なシャヴィエ

ルの後繼者」であるといつた。而もワリニヤノの研究はあくまで批判的精神を以て貫き、かりそめの盲信を避けたのである。

擬て、ワリニヤノは、一五三七年イタリアのブルツイ郡山中のキエテイ市に生れた。（生年については一五三八年、三九年説等があつて、さだかでない）パドアで法律學を修め、十九歳の時ドクトルの稱號を得た。一五六四年改心、耶蘇會に入り、ローマの耶蘇會の大學で、哲學及び神學を學んだ。一五七〇年公式の誓願を立て、その後間もなく品級の秘蹟を受け、一五七三年九月、四誓願を立て、印度の耶蘇會の巡察使を拜命するに至つた。一五七三年、ポルトガルのエボラの學院に行き、リスボンを経て、翌七四年ポルトガル人、イタリア人、スペイン人等四十二名からなる信仰使節の先頭に立つて待望のゴアへ着いた。彼が特に主力をそそいだことの一つは、印度半島の西南及び東部に残り半ば傳説的の聖トマスの子キリスト教徒をローマ教會に復歸させることであつた。一方常にワリニヤノの眼前に浮んだのは、東印度における耶蘇會傳道の創始者フランシスコ・シャヴィエルその人であつた。他の問題と共にシャヴィエルの研究は、彼によつて著しく促進されたのである。彼の巡察使としての職掌柄、シャヴィエルが嘗て

活動した舞臺へ限なく杖をひき、又直接シャヴィエルを目のあたり見、交りを訂した人々の總てに會ひ、又思ふところは總て之を遂行する権力を持つてゐた。加ふるに彼の批判的精神——營て法律學を學んだことが役だつたに違いない——は輕卒に物事を信じる危険から救つた。

一五七四年九月ワリニヤノは上陸早々に第一便（一五七五年初）を以て、ポルトガルの管區長にあて、ゴアに於ける傳道の概況と政治狀態を報告した。翌一五七五年には印度の南部を訪れ、キロンに十八日、トラワンコールに三十日、プニカルに二十二日滯留し、こゝから更に營てシャヴィエルの伴侶たりしA・アンリケスを伴つて、漁夫海岸へいつた。又サン・トメに四十日、ネガパタムに四日間逗留した。而してコチンからゴアへ向けて旅行中彼は耶蘇會の總會長に宛て、書翰を發し、その質問に答へた。

これより先、シャヴィエルの歸天するや、東洋における使徒的生涯はヨーロッパにおいて一大センセイションを巻きおこし、ポルトガルの王室を初めとして先づ事蹟調査が開始せられ、（一五五六―七年）諡福運動が次第に高まりつゝあつた。これは耶蘇會の創立者イグナシヨ・ロヨラの傳記作成と殆んど並行して行はれたのであるが、その印度史を以て知られるG・P・マフェイも亦ロヨラの傳記からシャヴィエルの事蹟調査へと進んだのであつた。マフェイは最初、リバデネイラのイグナシヨ傳を翻譯（ポルトガル語からラテン語に）して好評を博したのであるが、このイグナシヨ傳の中に、最初のシャヴィエル傳ともいふべき、簡単なシャヴィエルの素描が添へられた。マフェイはイグナシヨの傳記に印度書翰を増補して、一五七二年、一五七三年、一五七四年、一五八三年と新版を出した。なほポルトガル王はマフェイに、多年の

宿望たる東印度におけるポルトガルの英雄達の歴史の執筆を委嘱した。かくてマフェイは病弱の身を以てよくポルトガルの各地、リスボン、エボラ、コインブラ等の文書館に史料を尋ね、更に彼は目を遠く東洋の地印度及び日本へ向けた。但しマフェイは自ら東洋に姿を現はさず、その調査は耶蘇會の總長メルクリアンを通じて東洋に在る教師へ質問の形式をとつてなされたのである。

ワリニヤノはその質問に對する根本的な検討は翌年から開始し、日本書翰に就いては日本に到着後報告することにした。且つワリニヤノは、印度において爾後書かるべき書翰は一切誇張を避け單純と眞實を重んずべき旨配下に命令し、詳細は評議によつて決定することとした。

評議は、一五七五年十二月、ゴアに近いショラン島 *Chorão* で行はれた。参加者の中には、何れもシャヴィエルをよく識つてゐるA・アンリケス、B・ガゴ、M・テイセイラ並にデ・シルバ等がゐた。總長（メルクリアン）の命令によつて、ワリニヤノは、會合の師父達に先づ五十七の質問を提出した。その中、最後がシャヴィエルに關するもので「我がメストレ・フランシスコ師の遺骸は、以前にも増して大なる尊敬を以て我々の教會に齎すべきや」又「彼の生活とその奇蹟とに關する報告は更に詳細に證明せらるべきや」といふのであつた。第一の點については、神父達は答へて、今少し何とかしなければならぬが、教會へはシャヴィエルが聖人に陞せられずには聖骸を運び入れるわけには行かない、何となれば、人々は遺骸に對する尊敬のあまり、彼を聖人として崇敬するであらうと答へた。第二の質問に對して、聖メストレ・フランシスコの生涯と奇蹟の眞相が知れるやうな精密な研究が望ましい、さうしてこの調査は印度に於ける教會當局が行ふ

べきである、何となれば、この諸當局は、この事をより容易に、又疑惑や依怙鼻負なしに爲し得るからであるといふのであつた。

討議の直後、管區長會議が開かれ、そこで最初の五十一の質問を審議し、その他については決定を總長委任にする旨ワリニヤノに通じた。この管區長會議の決議はシャヴィエルを知つてゐたダ・シルバが代表してローマへ齎したのである。彼は一五七六年の初コチンを出發したのであるが、總長並にマフエイに興味のありさうな數多の書翰と貴重な文書を携帶した。この中にはワリニヤノの發見にかゝるロヨラがシャヴィエルに宛てた書翰やワリニヤノが總長に宛てた三書翰などがあつた。さてこのワリニヤノの三通の書翰であるが、その中の一通に、ワリニヤノは、討議や會議で取扱はれた五十七の質問について、彼個人の意見を述べた。その第五十七番目の質問に對し彼は次のやうに述べてゐる。

「第二の點に關し(五十七番目の)シャヴィエルの傳記に書いてある諸事實、眞の豫言らしく見えた若干の豫言を除けば、シャヴィエルが、何等奇蹟を行つたことを予は認めない、而して當地から證明された報告が發送されるまでは、一切の傳記が刊行されないやうに殿下も御注意願ひたい。その理由は、我等のイグナシヨ師の傳記の中には、このフランシスコ・シャヴィエル師について若干全然眞實ならぬ事實が述べられてゐるからである、而も之が檢討を加へることは今年度は既に時日がなくて不可能である。予が日本到着後若干のことが確定されると思ふが、明年その報告を送る所存である。それにも拘らず、教會關係諸應に報告の調査を迫ることは宜しくないと考へる。初期の證人審問(一五五六一—五五七年)で行はれた誤謬の確定せるものを外にして、列聖には材料が不十分と思はれるからである。何となれば、彼の徳が我等

の主の御前に、又全民衆の生き／＼した確信の中に、彼に聖杯を贈つたには違ひないが、所詮それは他の人々が書いてゐるやうな奇蹟によつたものではないからである。」云々

一五七七年の秋、ローマから一五七五年の會議の諸要求に對する總會長の返事がゴアに着いた。五十七番の質問に對し、左の決議が與へられた。

「メストレ・フランシスコ師の遺骸は、より適當な場所へ埋葬せらるべきであるが、討議によつて與へられた理由によつて教會内は不可である。さしあたり公の調査は爲さるべきではない、その理由は、既に行はれた調査(一五五六—七七年)に關しては、疑を挾む必要がないからである」云々。

一五七七年、ワリニヤノはテイセイラと共にゴア北方の傳道所を訪問し、次いでマラッカへ向つた。このマラッカ滞在八ヶ月の間に彼は閑暇を得て、「ゴア管區の綱要」を書き、その中で、モルッカ諸島及び日本を含む教區、その個々の傳道團體及び大學その種々なる困難と問題等をワリニヤノ特有の明確さと規帳面さを以て詳細に叙述したのである。ワリニヤノは、ピントーをアンボイナに遣はした後、一五七八年七月マカオへ大旅行を試み、そこで彼は支那人アントニオに會ひ、シャヴィエルの臨終について詳細の報告をきいた。いふまでもなくアントニオは上川島で、シャヴィエルの最期に唯一人近待した人である。

一方マフエイは印度書翰並に日本書翰を附した翻譯と印度史に對し、ワリニヤノが印度からの訂正乃至報告を待ちわびてゐた。ワリニヤノはマフエイの質問の大部分に答へ、又一方「ゴア管區の要録」の著作を始め(一五七七年)之を日本において完成した。ワリニヤノは一五七九年七月日本に向つたがこゝで日本について

研究を遂げ、先の著作が餘りに簡に過ぎて不完全に思はれたので新に「日本管區の綱要」を書いた（一五八三年）、それは日本の國と人民、習慣、宗教、個々の傳道所、日本傳道の重要性、傳道問題とその困難、傳道の財政状態等について詳細に報じたものである。

然しワリニヤノの著作中、更に重要なものは、「東印度における耶蘇會の起原と進歩の歴史」である。これは彼の多年の経験と研究を重ねて總長のメルクリアンが何回となく彼に勧め、メルクリアンの歿後は同じく總長のアクワビバが執筆をすゝめたものであつて、これは實に聖フランシスコ・シャヴィエルの完全な傳記に外ならず、印度、日本、及び支那の國と人民の詳細な記述である。この歴史をワリニヤイが起草した所以のものは、既に刊行されたものと未刊のものとを問はず、書翰の誤謬がヨーロッパに廣く行きわたり混亂を來してゐたためであつた。彼は既に一五七九年十二月口ノ津發總長宛の書翰において、今日までに刊行されてゐる日本書翰は事實と遠いものである、何故に日本書翰が日本及び日本人、日本傳道の誤謬を傳へてゐるか、それは新來者の無智と、教訓の誤つた希望から來る一方的の叙述とヨーロッパにおけるその普及が原因であると記した。更に彼は、書翰については夙に指令を出してあるけれども、廣く各方面から來るので一々吟味を加へることが不可能である、従つてポルトガルで傳道の書翰を刊行することは容易でないといつてゐる。

彼は「東印度における耶蘇會の起原と進歩の歴史」の序言において、この歴史の中には確實でないものは絶對に書かなかつたといふことを第一原則としたと宣言した。一五五六―七年度の調査及びその他の文書とシャヴィエルの奇蹟についてワリニヤノはかういつてゐる。「これでも（一五五六―七年度の報告）分る通り、

彼（シャヴィエル）は我々がこの歴史に述べてゐる外に、更に奇蹟を行つてゐることが明らかになつた。それらを私は特にこゝへ記さうとは思はない、それについては既述の文書をお薦めする」云々。

ワリニヤノが一五八三年ユチンで、彼の歴史の最後の邊りを書いてゐる間に、リバデネイラのイグナシヨ傳が増補訂正され、更に一般を目ざしてスペイン語譯が出版された。それがその秋ゴアに着いて大歓迎を受けた。この著述はヨーロッパに關する限り信頼のおけるものであつたが、シャヴィエルの傳記や印度に關する限り甚だあやしいものであつた。

このリバデネイラの「イグナシヨ傳」に對してワリニヤノは如何といつてゐるか。一五八五年、ワリニヤノは總會長に宛てた三通の書翰の中で、リバデネイラ、マフェイ、テイセイラ、並に印度書翰並に彼自身の文獻的活動についてかういつてゐる。

「印度書翰について再版は大に要望され、總長は印度に於てそれを訂正するやう希望された。然し管區長はこれは困難な業で不可能とさへ考へた、ゴアに於ける管區の文書館におかなかつた爲に日本から來たものや、マフェイがラテン語に翻譯したものを除いてそこには刊本の書翰も又その原本もなかつた。」

そこでワリニヤノは印度の歴史をつゞけ、印度書翰の調査をつづけた。印度書翰の再版は不可である、未だ訂正すべき點が多々ある。人名、地名、又印度の事情の不案内な爲におかした誤謬がある、又、譯者は屢々誇張したり、時に意味をとりちがへてゐるものもある、マフェイの書いた歴史もそれを刊行する前にゴアへ送つて檢閲さるべきであつた。

その中には確かに多くの誤謬がある。その他について、彼は印

度書翰はすべてコインブラにあることを聞いてみたので、彼等は少くとも年々の印度書翰の主要な點の抜書を彼に送らなければならなかつた。而して一五六四—一五七四年以來の日本書翰は、そこには欠けてゐた。

第二の書翰（一六八四年十二月十五日コチン發）に於て、ワリニヤノは彼の秘書ヒール・コッタ（Hier Cotta）がこの年ローマの大文書館の例にならつて、ゴアに管區の文書館を創つた、人は皆過去に於てこの事を見落してゐたので、そこには殆んど何の書翰も文書もなかつた。日本、マラッカ、その他に於て作られた取引契約の記録もない。各戸は各自の記録を保存した。然し將來問題は變るであらうといつた。

第三の書翰（一五八五年一月十六日附コチン發）に於て、ワリニヤノはリバデネイラの「イグナシヨ傳」についてかう言つてゐる。

「イグナシヨの傳記においてリバデネイラは東印度における耶穌會の發展を取扱つた爲、第三卷第三章に於て彼は異教徒の間に於けるコインブラとゴアの學林の結果について記してゐる、十九章において、彼はクリミナールの生活と殉教に關して報告してゐた。然るに彼は第四卷第七章を全部フランシスコ・シャヴィエルの生涯に捧げその中で彼は日本におけるシャヴィエルの伴侶であつた者の日記による報告を得た。即ち日本人ベルナルドで、一五五四年ローマで識つたのであつた。リバデネイラが三つの補遺を以て増補したが（アンジローの改宗、シャヴィエルの最初の病氣、等——列聖文書一五五六—七）これは一五八三年のスペイン版の中に入つてゐる（第三卷第五章、第二十卷、第四卷第七章）。

後に同じくシャヴィエルの傳記を書いたデイセイラもリバデネ

イラの著作を見て、多くの誤謬を發見し、その誤謬を詳細に報告した。デイセイラのこの書翰を、ワリニヤノは南トラワンコールのコラシエルへ持參した、而して一五八五年一月その地方の宣教師を集めて、シャヴィエルが、漁夫海岸の長老に任命したAアンリスケに鑑定を請うた。その結果をコチンへ歸つた後、アクワビバに宛てた第三の書翰にかいた。

ワリニヤノは一五七九年日本へ渡り、着々その抱負を實行し、三年後には日本から大友、有馬、大村の使節を伴つてゴアへ歸つた。ワリニヤノはゴアに残り、メスキッタが代つて使節をヨーロッパへ伴つたが、一五八二年、大友義鎮が總長並にワリニヤノに對し、教皇の許へシャヴィエルの列福を請願したことがある。

（豊後王大友フランシスコの手紙—和蘭雜話）アクワビバはこれに對しワリニヤノに答へるところがあつたが、ワリニヤノ又一五八六年ゴアからこれに答へた。

その書翰の中に、ワリニヤノは、貌下はフランシスコ・シャヴィエルへ證福を求める豊後王の請願について云々されてゐる、シャヴィエルは神聖至福で天國に在すから、それには十分値するには相違ないけれども、かうした重要な事柄に關しては、よく目を配り、疑義を挾む餘地のない確報に基づくやうにしなければならぬ、何となれば既に故メルクリアンにも申上げたことであるが、國王ジョアン三世の命によつて當地で作成された報告は多くの點において甚だ疑しく不確實だからである。といふのは全國民は上述の神父によつてよく教化されたけれども、いはれることを悉く輕信したからである。かうした場合よく起ることであるが、あり得ない多くの奇蹟が見出され、それからは明證を拒否して他人の語つたものを容易に事實として報告したのである。故にこの時代

において行つた調査に従へば、上述の國々の役員達によつて行はれた報告は確かなものではなかつた。云々

一五八七年五月、ワリニヤノの計畫した日本の遣歐使節の一行がヨーロッパから歸つて來た。ヨーロッパでは、使節の出現は、炎と燃える十字軍の説教のやうに人々の傳道熱、特に日本傳道熱を煽つた。然し日本にあつては信長逝いて秀吉その後を嗣ぎ、形勢は一變したのである。ワリニヤノは印度副王の使節として日本使節と同道再び日本へ渡航した。一五八八年ゴアを去り、マカオに一年滞在、一五九〇年日本へ着き秀吉に謁見、日本在留の教師團を激勵して、一五九二年再びマカオへ、更に巡察使として印度へ歸つた。然しこゝでピメンタルと交替し、彼は巡察使として一五九七年マカオへ歸り、翌年八月、三度日本へ上陸し、こゝでマカオで始めた「日本及び支那の傳道の擁護」を完成した。彼はこの度、シャヴィエルの滞在した山口に傳道所を開いた。やがてワリニヤノは暇を見出して新たにシャヴィエルについて著作をした。題して「日本におけるキリスト教の起原と發展について」といふ。

ワリニヤノは、一六〇一年、日本史を書いてゐる最中、偶々マフェイ及びトルセリヌスの著作を入手した、又一六〇三年マカオへ歸ると、ここでは又ゆくりなくもルセナのシャヴィエル傳に接した。一六〇四年ワリニヤノは、彼の「日本史」の一部を總長アクワビバへ送り、それに書狀を添へた。それは同時に彼の「シャヴィエル研究の問題における最後の言葉」であつて、その中に彼はかういつてゐる。

「一六〇一年、私はこの王國で耶蘇會の起原について、日本史を書かうと決心した、四ヶ月後、私は第一部を終り、……その後

第二部を書くべき時間がなかつた、……船が出てしまへばマカオでその時間があらうと期待してゐる。然し私は刊行された書としては、一五八〇年までの分を持つてゐるばかりである。その後の分は持つてゐない。従つて今後、私は何語かの最近刊行された書翰を入手したら、初めてそれについて書けるといふものである。私は代理人として出帆するフランス・ロドリゲスに命じて、これらの書翰を入手せんとした。何となれば、確かな眞實な歴史はこの地の場合を除いては書き得ないからである。こゝでは眞相をたしかめ疑惑を解くことが出来る。……ヨーロッパでは印刷する前に文體がよりよく整理されなければならない。マフェイ師はその書翰のラテン譯に於て、又その印度史において他の人のよりも詳しく、他の本に見る誇張がない。……

私は自分の著作に當つては私が述べたことを證明しようと努力した、何となれば我々の仲間が日本の事どもについて書いた種々の書翰や書物の中には、正確さや批判的な心持なしに近ごろこの國へ來たばかりの人たちによつて書かれてゐる色々のことが見出されるからである。

之等の國々で個人的の經驗を持たない人達が、之等の國々について書いてゐるものを整頓しようとする時、彼等はヨーロッパの概念に従つてそれを説明し解釋するので、非常に大きな錯誤に陥るといふことは經驗の示すところである。故に私は出来るかぎり何ものも省略されず、又説明されず、或は他のものが附加されもしないことを、さうして如何なる種類の誇張をも避けることを希ふ次第である。何となれば、眞實を申せば、恥しながら私は、我が書翰並に祝福されたメストレ・フランススコ・シャヴィエル及び支那日本の國人について書かれた歴史の中に除いた方がよか

つたと思はれる事ども、多大の誇張をもつて書かれた事どもを澤山見出すからであつて、これは私には殊に聖人の傳記にふさはしくなく、甚だ失當と思はれるのである。

それらの中で訂正すべき一切の錯誤について書くには、多くの時間が必要と思はれるが、私には今その時間がない。私は代理人の神父がその中若干について貌下と相談するやうに彼に薦めた次第である。貌下の神聖な祝福に於て擱筆する、

マカオ發、一六〇四年一月二十四日

アレックスサンドロ・ワリニヤノ

以上はワリニヤノが、シャヴィエル探究の態度を、小さな節穴から覗いたものである。なほ且つワリニヤノが如何に嚴密な批判的な態度、眞正なる歴史家の態度を以てこれに臨んだかが伺はれよう。而も彼はシャヴィエルに對し最大の尊敬の念を失はなかつたのである。實に彼は偉大なるシャヴィエルの探究者であると共に偉大なるシャヴィエルの後繼者であつた。我々はシャヴィエルの傳記に接する時、ワリニヤノの態度に學ぶべきものが多いのを痛感する。

この偉大なる歴史家ワリニヤノは、一六〇六年マカオで歸天した。

(この一文は多くシュールハンマー師がポルトガル發行の「史學雜誌」Revista de Historia, No. 47, 48, Lisboa, 1923 に寄せられた「十六世紀におけるシャヴィエル研究」に據つた。)

切支丹山屋敷圖について

(口 繪 解 説)

岡本三右衛門やシドッチらの收容されてゐた江戸小日向の切支丹山屋敷に關しては、寛文十二年から元祿四年迄の同屋敷の記録である查妖餘録(續々釋書從第十二所收)が傳へられてゐるほか、通航一覽(圖書刊行會本五ノ一八九一―九五頁)や東京市史稿(市街篇第六、一六八―一三八頁)にも資料が蒐録されてゐるし、山本秀焯氏の「江戸切支丹屋敷の史蹟」(大正十三年刊)及び川村恒喜氏の「史蹟切支丹屋敷研究」(昭和五年刊)の如き著作も出版されてゐる程であるが、山屋敷の繪圖としては僅かにたゞ一つ「小日向志」所載のものが知られてきたに過ぎない。(此の繪圖は川村氏の前掲書によつて初めて正しく傳へられた。同書の口繪は水戸彰考館本の寫眞である。)しかるに、この書は文政年間の作といはれてゐるから(通航一覽)、山屋敷の廢止された寛政四年から既に三十餘年を経たのちの著述である。従つて、同書の山屋敷に關する記述は「當然繪圖もまた」「その廢せらるゝ頃までのさま」を後年に筆録したものである。

しかも、山屋敷は享保年中に一度火災を被つてをり、且つ幾度か縮小改變のことが行はれたのであるから、小日向志所載の繪圖が、廢止當時の形態を比較的正しく傳へてゐると假定しても、岡本三右衛門らの切支丹が實際に收容されてゐた時の状態とは相當に違つてゐたであらうことが容易に推測される。